



平成14年度 教化研修会

## あらたまの年に想う

府長園田稔

特集  
教化実践活動

## 第百六拾参考号

発行  
さいたま市高鼻町1-407  
埼玉県神社庁  
電話048(643)3542番  
編集室  
印刷  
アサヒ印刷(株)

平成の御世も、はや十有五の初春を迎えて一つの時代を成すの感があります。畏くも天皇、皇后両陛下には、まことにご機嫌麗しく御まつりごと懈怠なく参らせ給いて、めでたく本年の歳旦を言祝ぎ給い、東宮ならびに東宮妃両殿下、たぐい稀なる皇孫の敬宮愛子内親王殿下を慈しみ給う御すがたを拝することは、我ら国民等しく限りなき慶びとするところであります。

しかしながら、ひるがえって我が国内外の世情を観るに、その情勢はまことに容易ならざる事態にして、国際社会は深刻な経済不安に翻弄され、世界各地は悲惨な無差別テロの脅威に怯えつつ、地球規模の環境破壊に直面して、そのいづれにも然したる有効な手立てを打つことも叶わぬありさまです。

だが今に生きる我々は、ここで諦めるわけにはゆかない。何千、何万年の歴史を引き継ぐ今の世代を生きる者として、未来の次世代を担う若者たちに精一杯豈かな希望を託すべく、日頃の努力や精進を怠らない責任があるのです。

幸いなことに我々日本の国民は、民族文化の香り高い皇室を拝戴し、そのご安泰を無上の喜びと心の糧にして、共に新春の立ち返りを祝うことができるのです。

とにもかくにも、こうして新元の年を迎える、その幸せを神々に祈り祖先に感謝して心豊かに正月を祝う慶びを、我々の身近な家庭や地域社会にも取り戻すよう尽力することが、せめてものささやかな神社人の勤めではないでしょうか。



## 基調公演抄録①

**小林保男先生**  
「人口急増地帯における増頒布運動」

吉田了



実は、神社界は不思議なところで、現状を知らないで色々な問題を定義し、定義する事で安心してしまい、結果を重視しない。対社会的に取り組む時、一般企業に比べてこの点が大きいに遅れている。神職は仲間や氏子さんとの対話はできるが、神社が嫌いな人や無視する人たちとの対話がない。しかし、こういう人達からの発言を嫌でも一つ一つクリアしていくならば、神社界にとつて大きなエネルギーとなる。

東京では、神宮大麻の頒布数が、七年前の四一万体から連続の減体で現在三五万体である。しかし、どうもこの数も出ていないとの噂から、二度目のアンケート調査では、頒布終了祭以後も年間を通して頒布をしている実態を踏まえて、各社で余分に抱えている「保

有数」という名目で調査を行つたところ、何と一〇万体もの数が頒布終了後も残されていることがわかつた。つまり、そこを見ないふりをしていると増頒布運動は進まないのではないかと思っている。

私たち、日本の伝統であるから神宮大麻は当然出てもいい、当然出でいいものが出来なくなつたのは、日本がおかしくなつたのだと定義しがちである。しかし、時の流れは止まらず日本は脈々と生きているので、動いている日本を止まつているように見るのは、一緒に動いていなければならぬ。流行りのようになつたのは、日本人の心も少しずつ変わつてゐる。この変わりざわを上手に見ていかないと取り残されてしまう。

東京の減体の理由として、都市化による本

来の氏子の流出・老齢化、不定住者の増加、神宮大麻の認識の低さ、生活習慣の変化が挙げられるが、朝の神棚参りをして一日の生活をしている方は今や日本人の平均的な姿ではない。國學院大學の石井研士教授は「当然、日本人がやつているだろう」ということがやられていないのに、「(神職は)なぜ、やつているんだろうと思うんだ」と指摘している。

戦前は、学校教育で生活のありようを教えていた中で神社のことを教わつた。それは神社界にとつて凄まじい財産となつたが、戦後は、私たち神主が教えることを忘つてしまつた。

都神社では、三年前から一泊二日で子供

受けているが、さらに普段の教化活動が大切と考え、若い神社関係者に「社頭講話の手引き」の作成を呼びかけた。しかし、これは手引きの完成に目的があるのでなく、これから若い人たちが神社の良さや自分で思つたことを相手に伝えられる力を持つことに意味があり、そのことがひいては神宮大麻の増頒布につながっていくと思っている。

(教化研修部員)

## 基調公演抄録②

**石川國樹先生**  
「氏子総代等による増頒布運動」

安曇清和



の菊名神社の場合、氏子三〇〇〇戸の中、アパート・マンション以外は全戸を訪問し、大麻頒布をしている。

私は高校一年より頒布に関わつたが、その

中で色々な経験を積んだ。その体験を通じ、その後の勉強を重ね、組織というものに着目した。

当社では、私の亡父が奉賛会という組織を作っていたが、組織改革が必要と考え、その一環として婦人部を新設した。そして、婦人部とともに頒布をするという意識を高めながら大麻頒布活動を行い、効果を上げた。これからは女性の力というものが必要であり、今後、婦人部にどれだけのことを期待し、且つ、大麻を受ける家庭の「大麻とは何ですか。」という問い合わせに対して、どのように説明していくかを考えていかなければならぬと思ふ。

私はその中で、「神宮はあるさと」というような、親しみを持てる言葉が良いのではなかろうとの観察をしていて、現状に満足するというのではなく、時代と共に変化していく大麻を受ける家庭の「大麻とは何ですか。」という問い合わせに対して、どのように説明していくかを考えていかなければならぬと思う。

また、港北区二一社の中で、氏子総代会がある。各社七・八名の総代が集まり、合わせて約一五〇名の総代を前に、どのように話をしたら良いかという問題がある。大体が年配の方々なので、話の進め方が難しい。

私はその中で、若い人の育成を図つて行きたいと思っている。菊名神社では、総代五名と共に、世話人とは言わず、「理事」という名で一五名を設けて、合同で話し合いを行う。理事の中には若い人も含まれ、若い人が

いれば、話の中に新しい考え方も当然反映され、また、将来の総代育成も図れる。

(教化研修部員)

### 猿田正城先生 基調公演抄録③

#### 「神職等による頒布運動」

大川 守夫



奉仕する神社は、猿田町という銚子といつても内陸部の純農村地域にある、氏子数八十戸の猿田神社です。昭和五十八年、私が四十八歳の時、父が重病になり、当時高校の教頭目前でしたので迷いましたが、教職を退き神職の道を選びました。

体に対し、平成十二年は四〇七体でした。増体の背景には、支部長・事務長の熱意、神社・神職への親近感、信頼感、施設の充実、ポスター掲示物の効果などが挙げられます。ロータリークラブを通じてのスーパー・銀行など企業への働きかけ、地鎮祭等の送迎車内での働きかけ、などが挙げられます。

大麻奉斎のすすめ方として、寛容で明るい神社神道は素晴らしい、その基となる実践は家庭に大麻を祀ること、大麻は、元来罪や穢れを取除くためのもので災厄から守られる。大麻を祀り、朝夕、両手を合わせれば、明るい心が生まれ心豊かな人間になれるなどです。

大麻頒布の状況は、増頒の一途を辿つております。昭和五十八年の五〇体に対し、平成十四年は、五三〇体の頒布を予定していま

す。昭和五十八年の五〇体にあります。特質とは、人間をはじめ、全ての生物は大自然の恵みと神の恩恵によつて生かされています。私達は、先祖の力を受けて存在し、子孫につなぐ大切な役割を担つています。また、人々の助けによつて生かされています。その本質が失われつゝあるのは、家庭から神棚が失せ、日常生活から祈りと感謝を表す場が消えたことに要因があります。平和で心豊かな日本の再生のため、神棚に神宮大麻を祀る家庭が一軒でも多くなるよう努力したいと思っております。

(教化研修部員)

## 分科会報告

### 第一分科会

#### 人口急増地帯における増頒布運動

伊藤省治

### 現状

- 高層マンションが建設され、住んでいた氏子がいなくなってしまった。

- 元々、社頭頒布のみであり、年によってばらつきがある。

- 十年前に大きな団地が出来たが、神職自身何もしない。

- 氏子がない神社なので、自治会の回覧で頒布をお知らせし、個々に社頭で頒布している。
- マンション等の新しい住民の方に對して、どう取組んでもゆくか。
- 神職自身、総代さんと如何に協力してゆくことができるか。
- 白衣を着ていても新興宗教等と勘違いされてしまい、話さえ聞いてもらえない。
- 日中は留守の家庭が多い。



### 課題

- 地鎮祭の際に、簡易神棚と御神札を贈呈し、家庭祭祀を推奨している。
- 神社は「心の実家」であり、女子神職の特性を生かし、相談・聞き役になつている。
- 身近にある神社の存在を知つてもらうことが必要である。一例として、ホーミページの開設がある。
- 大麻頒布のみを考えるのではなく、神社が地域社会の為に何が出来るかを考える必要がある。その為に、全員が参加出来る行事・祭を行つてゆきたい。

### 講師からのアドバイス

初富詣等にこられた方々との結びつき

- 高齢者世帯が徐々に多くなり、世間とのつき合いを避けようになつてきた。
- 新住民には、地域への無関心者や神棚を祀る意識の薄い人が目立つていている。

### 第二分科会

#### 氏子総代等による増頒布運動

高橋信和

### 課題と問題点

- 高齢者世帯が徐々に多くなり、世間とのつき合いを避けようになつてきた。
- 新住民には、地域への無関心者や神棚を祀る意識の薄い人が目立つていている。



(教化研修部員)

### 実践事例

- 頒布の際に、「家庭のまつり」・「むすび」

- 総代の任期が短期になり、諸事業の継続が困難になっている。

- かつての神社に奉仕するという総代の意識は薄れている。

### 実践と改善点

- 大麻の説明文で服忌関係に触れ、五十日過ぎたら奉斎してもよいということを明記して欲しい。
- 社頭祈願や出張祭典等の機会を捉えて、教化に努める。
- 氏神の神札等と神宮大麻をセットにして頒布すると受けて頂きやすい。
- 総代の任期が短期になつてるので、協力的な総代の方を別枠にして残つて頂く工夫をしている。
- 神社規則に基づき、総代の任期を三年として、自治会役員の任期と区別している。
- 総代や世話人等に、能動的で活力ある人たちに加わって頂き、イメージを変えてゆく。

### 石川講師より

- 神社経営という視点から、総代等の組織や役割などを見直して行く必要がある。総代の下に理事を置いて役員の若返りをはかったり、婦人の組織を盛り上げることに努めてきたので、神社運営がスムーズになつてきた。総代等に協力して頂くためにも宮司のリーダーシップが大切である。

(教化研修部員)

### 改善点

である。

## 第三分科会 神職等による増頒布運動

千島直美

### 現在の状況と課題

千島直美

- 神職の有様によつて、頒布状況も変わつてゐると思う。氏子が宮司の言うことを理解してくれるようになることが本当の姿である。

- 昔から神職は、外に出て話をしたり、自分の方に目を向けたりするのが下手であるべとして御札を進めるのがよい。

- 氏子の気持ちになつて、幸福になる道しるべとして御札を進めるのがよい。

- 関東のある神社では、年末年始大麻頒布の各戸訪問を行つてゐる。この際学生を使つてゐるが、これは神宮の尊嚴を傷つけないか。

- 家庭祭祀が神棚祭祀に集約されてしまつた。単に増頒布すればよいのではなく、長い目で見て、神社祭祀と家庭祭祀の違いをはつきりすることが発展につながる。

- 三世代家庭が崩れ、各戸の訪問頒布は、恐怖を感じる人がいる。

- 松戸の本土寺の住職は、精進料理を食べに来た参加者に對して、「家庭の中に祈りと感謝をする場所を持たなくてはいけない。それが仏壇である。

### 講師からのアドバイス



### 実践事例

- 増頒布については、氏子名簿が整つていると頒布率がよい。
- 本務社の氏子地域は一人で行つてゐる。この為一〇〇%に近い頒布率を得てゐる。
- やはり神職は、自分の足で歩くことが大切である。

(教化研修部員)

## 神職自身のあり方を問われた研修会

諫訪秀一

平成十四年度教化研修会は、「一千万家庭神宮大麻奉斎運動」の教化推進を目的におこなつた。主題を「よみがえらせよう日本の心」とし、副題を「一千万家庭神宮大麻奉斎運動への取り組み」とした。研修会では、「日本の心とは何か」という質問が出された。主題への明確な共通理解なくして、豊かな討議は期待できないと考えたからであろう。

人によりとらえ方に幅はあるが、神社本庁憲章でいう「敬神尊皇」あるいは「敬神崇祖」こそ日本の心の根本といえよう。

蘭田庁長は、基調講演で「社会が変化し歴史認識も変わって、四十代以降の人は神や日本人の素養や文化について白紙に近いが、教化すれば可能性は十二分ある。それには、それぞれのお社を地域の中に位置づけ、地域や家庭づくりのお手伝いをしなくてはならない。そして人々の心の田を耕し、神職はもちろん、氏子総代さんにも増額布に立ち上がりたい。ただくようにしたい。」と話された。

今回の研修会の分科会は、本人の参加希望をそのまま生かし、問題意識が深められ発展するようになると願つて構成した。

「神職等による増額布」分科会の講師をお願いした猿田正城宮司は、「めざす神職像を「頼られる神職」・「奉仕する神職」・「人のしなかつたことをする神職」とし、がむしゃらに努力されてきたという。後日、猿田神社を参拝し、社殿の造り・境内の施設・備品・領展品・『宮司の言葉集』・ひびく祝詞の工夫等でたいへん教えられた。地鎮祭の送迎車の中では、百パーント神宮大麻奉斎の話を成立させておられるという。

「氏子総代等による増額布」分科会の講師をお願いした石川國樹呂司は、文句を言われても総代さんに近づく。長く苦労いたいた総代さんは名譽総代になつていただき、若い活気のある方や女性総代にも入つていただき、活力ある氏子総代会にしているという。

「人口急増地域における増額布」分科会の講師をお願いした小林保男宮司は、ご自分で教化講話等をまとめて出版されているが、「都市では、出会つた一人一人をしっかりとらえていいといけない。親しくなる以外にならない。氏子名簿は本当に大切だ。」と言われた。小林宮司の天祖神社にその後の夕方伺うと、住宅街の森の中では外灯がともり、拝殿や山車倉を静かに照らしていた。

(教化副委員長)  
平成十五年度版神話カレンダー  
『天照大御神』について  
林伊佐雄



1 令和元年(平成30年・西暦2018年)							2 令和元年(平成30年・西暦2018年)						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
5.	6.	7.	8.	9.	10.	11.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.
12.	13.	14.	15.	16.	17.	18.	9.	10.	11.	12.	13.	14.	15.
19.	20.	21.	22.	23.	24.	25.	16.	17.	18.	19.	20.	21.	22.
26.	27.	28.	29.	30.	31.		23.	24.	25.	26.	27.	28.	

2月行 埼玉県神社庁

神話カレンダーは、神話の啓蒙活動を目的に平成十三年版より始まり、平成十五年版で三年目を迎えます。この三年間、本県が「一千万家庭神宮大麻奉斎運動」の指定県になつたことを受け、平成十五年版は、「天照大御神」をそのまま生かし、問題意識が深められ発展するようにと願つて構成した。

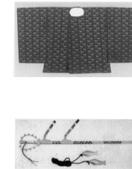
本事業は今まさに始まつたばかりであり、一年間をかけて埼玉県下の神職の皆様一人ひとりが「語り部」となつて、あらゆる機会を通して天照大御神様のご神徳を氏子の皆様にお伝えしていただけたら幸いでございます。

(教化事業部長)

## 啓蒙パンフレット作成記

東秀幸

### 神道と私



この度完成された、実務部作成による一千万家庭神宮大麻奉斎運動啓蒙パンフレット「神道と私」であるが、その作成の過程を振り返つてみたいと思う。

先ず、部会内では新規作成するパンフレットの配布対象が検討された。例えば、県内において神棚奉斎をしていて神宮大麻を奉斎していない家庭は十三万世帯に及ぶと推量されている。増頒布の即効性としては、この辺りを徹底頒布し、すでに神棚奉斎されている点から、一過性に留まらず、相当の結果が期待される処ではあるが、敢えて当部会では「神棚奉斎していない人」を配布対象とした。それは神社本庁その他の機関の全国調査では、この二十年の間に約一割の家庭から神棚が消えているという。二十年前と現在では戸数も違うし、単にこの調査通りとはいえないが、それでも、新築家庭等では神棚奉斎される事が減少し、家の祭りの継承がなされていな、憂える状況であると推測される。本運動

の実現には、指定県の増頒布はもとより、各都道府県の底上げが求められているのである。従つて、当部会の啓蒙パンフレットは神棚奉斎していない人を対象に、全国的スタンダードと成りうる物を最終目標としたのである。それに先ず、直接的な教化の文面の可否が議論された。神宮・神宮大麻・神棚への認識はその奉斎において不可避であるが、現在そのようなパンフレットは数多あり、一定の成果を挙げている。また、神社庁のホームページにも詳しく掲載されている。新規作成のパンフレットは同様なものは敢えて避け、対象者に受け入れやすく間口を広くするべきであるという意見があつた。その手段として、著名人の言葉による間接的教化がある。

例えば、長嶋茂雄氏の写真と共に「神宮は清々しきところ」といった言葉があれば、ごく一般の方にも何の抵抗感もなく受け入れられるだろうという説である。

以上が部会内で決議されたところで、部員各自がA4版三つ折りという規格のもと、試作品を作成するということとなつた。当初の私の試作品として、先ず、表紙にタイトル「神道と私」とし、神宮の御神宝二点の写真を配した。次に見開きに神棚の写真と共に「神

社・祭・家の祭」について簡単な文書を入れ

た。例えば、家の祭では「もう一度、季節のものは神棚にあげてからだよ!」という家庭を作りませんか! 喜んで子供が帰つてくる家庭から!」といった文章である。最終面には長嶋氏の「神社は心引き締まるところ」というタイトル・文章と、本人による玉串拝礼の写真と顔写真並びに略歴を入れた。そして中の一面を使い、「北島三郎・家のしきたりは神道で」「浅野温子・神社は異空間へのたび」「田中美佐子・私を育んでくれた隠岐の自然」「小林稔侍・僕の体に染みついてる神社」「伊勢正三」といすれも写真・文章・略歴を入れ、それぞれに神道・神社・自然への関わりを語ったものを記した。これらは、試作といふ段階で、「むすび」より転用したのだが、公に配布する事を考えた場合、著作権或いは肖像権といった問題があるという事が分かった。そこで福井部長が神社庁・神社本庁へ問い合わせをしたところでは、既にそのような権利は「むすび」を作つた時点では神社本庁側にあるそうである。

結局、教化委員会正副部長会議において表紙と長嶋氏を残し、「文字数が多くすぎる!」という理由で、私の試作品はあえなく露と消えてしまつたが、部員各自の意見が更に反映され、パワーアップされた完成品を手にした時、ひとつの目的が達成された充実感があつた。ドミノは並べられたのである。

(神社実務部員)



## 神棚奉斎啓蒙活動体験記

押 田 豊



神社本庁より「二千万家庭大麻奉斎運動」における増頒布指定県（平成十三～十五年度）を受けて、埼玉県神社庁では「推進会議」を立ち上げ、現在、神社庁及び各支部や個々の神社で諸活動が企画実践されています。教化委員会では、これまで、各支部における大麻頒布式の実態調査並びに報告、対神職への「神まつり」の大切さを再確認するための教化研修会等の開催、また、蘭田稔庁長始め河野・中山副庁長のご協力を得て、各支部総代会総会時や、各地区大麻頒布式における大麻増頒布意識啓発の講話ををしていただいております。

今回、神社実務部（福井千秋部長）が、神社に関わりの薄い方々を対象にした「神棚奉斎啓蒙パンフレット」を作成し、祭儀研究部（竹本多恵子部長）の「むすび」配布と行動を共にしながら、教化委員会としては初めて

西口へ。二十五名参加のもと、午後二時頃配布活動を開始。最初は、声をかけるタイミングが難しく、歩行者の反応も今一つで、配布物がなかなか減らない状態。別の声掛けグループもあり、少し臆するところもありました

が、教化委員の人達を見渡すと、皆一生懸命に呼びかけをしており、気持ちを新たに行動再開。時間が経ち、徐々にお渡しする間がわかつてきました。準備された一千部の配布物は全て無くなり、街頭活動は無事終了。

配布活動の中、歩行者からいろいろな質問があり、教化委員の方々はその都度丁寧に対応し、神まつりの大切さを訴えていただきました。また、当日産経新聞の取材もあり、翌日の埼玉版に掲載されました。神社庁にさつそく読者から神棚のまつり方にについて問い合わせがあつたそうで、大変うれしく思います。

今回の街頭活動を通じて感じられたのは、それの方々の前向きな行動姿勢です。それぞれが、混迷した現在の世相に危機感をもつてこの頒布活動に参加されていたような気がします。自らの職業や、神社の果たすべき役割を再確認するよい機会にもなったと思います。

今後各神社においても、大切な日本の心を極的に実践されることをご期待申し上げます。

## 街頭配布体験談

石 山 信 昭

この度、祭儀研究部と神社実務部が共同して、神宮大麻増頒布を目指し、大宮駅駅頭で「むすび」そして神宮大麻啓蒙の葉を、花の種を添えて配布し、その一員として参加しました。

このように不特定多数の人にものを配るというのは初めてで、大変緊張しながらの体験でした。そのような中で二つばかり感じたことがあります。

一つは、なかなか受け取つてもらえず嫌になりましたが、受け取らない人でも、「あー、要らない、要らない」とはじめから拒否する人と、「どんな配りものかな」と一応は配布物を見て、それから要らない、と拒否する人がいる、ということに気がつきました。今回、ビニール袋に丁寧に入れ、「むすび」も葉も色刷りのきれいなもので、花の種も入

れてあり、大変良かつたと思いますが、貰つてみようかな、貰つて得した、と一目で感じ



させるもの、例えば、花の種の袋がもつと大きく、ビニール袋の半分位の大きさうでしょうか（今回は九分の一）。付録の研究も課題と思います。

次に、今回三ヶ所に別れて配布しましたが、ある箇所で早く配るもののが無くなってしまった場合の、人の移動撤収等、どのようにしたら円滑にいくのかの検討も必要だと思います。

（教化副委員長）

### 街頭配布体験談

福井千秋

「継続は力なり」かなと。大宮駅西口で、さまざまの光景に出会うことができました。街頭に立つまでは、不安でいっぱいでした。が、配り始めて、最初のパンフレットを受け取つてから後は、うれしくもあり、またおもしろ味も覚えてきたような気もします。

神社と縁のない生活をおくつている人達に、神棚また御札のはなしをして、関心を持つもらう事は、そう簡単にいく事ではない

と思いますが、今回の第一回目の街頭配布は、啓蒙活動の一環として得るものが少しあつたような気がします。そして、この活動は、今回だけでなく、継続していかなければならぬと思います。そして、一人でも多くの神職さんに街頭に立つていただけたらと思います。ある教化委員が、「神様も、外にでてきた私はこの言葉が印象的で耳に残っている。」など思いました。

（神社実務部長）

### 街頭配布体験談

吉田幸年

（神社実務部長）

平素、大宮駅西口は、東口より若者の通行

数が多いと聞いていた。催しもの・大型店への買物の帰り客等の流れの様子にて配布位置を決めることにした。平日の昼下がりでもあり、やや通行人も少なめの感があった。普段、私達は神職の立場で物事を見つめ対応していることが多いとあると思う。今度は、白衣を着装。「埼玉県神社庁」名入の襷をかけ、街頭にてパンフレットを配布することに、いささかな抵抗があつたことは事実であった。手渡すタイミングは難しく、受けて貰える年令層は中高年人達や家族連れなどで、学生や若い人達、サラリーマン風の人には殆んど無視された。人によつては顔を背けるなど、思ひもよらぬ体験を得た。殊に、スーツに白衣を着ただけで襷なしの自分には、信用性がないことは確かであった。「庭に花を咲かせませんか。参考になりますので読んで下さい。」の

呼びかけにどのように受けとめて貰えたか。短時間で完配布出来たことに、関係者共々成果を期待致します。

（神社実務部員）

### 街頭配布体験談

関根美江子

埼玉県神社庁教化委員会、神社実務部と祭儀研究部および、そのほかの部員の協力のもと、初の試みとして、神棚奉斎啓蒙パンフレット・「むすび」・「家庭のおまつり」となでしこのタネを一セットに、街頭配布を大宮駅西口で行つた。

始めてのことでの不安が先立つていて、全員で大祓詞を唱え、心が落ち着き「やろう」と思った。

受け取つて下さる人。目をそむけ、その場を足早に立ち去る人。様々である。祀り方について質問をされたり、「今日は何ですか」と怪訝な顔をされたり、様々な反応が帰つて来た。私達も内にばかり籠つていないので、外出に出ることは大切なことだ。この様な活動は、一度限りで終らせるのではなく、継続することが大事だ。そして、神棚を祀ることが当り前のこととして受け止められる日が来るまで、根気強く活動を続け、一人でも多くの人に理解される様、努力しなければと思つた。

（神社実務部員）

パンフレット街頭配布に参加して

東秀幸

凡そ街頭配布物には、自分自身を含めて無関心な人が多い。「埼玉県神社庁です。家庭のまつりのパンフレットをどうぞ。」と声を掛けれるが、誰も受け取る人はいない。それはそうである。言っている間に五人は通り過ぎている。従つて、言葉を短略化して伝えなければならない。様々に試行錯誤しながら、最終的に「神社です。神社の事が書いてあります。」に辿り着いた。通行人に対し、訳の分からぬ団体という誤解を避け、端的に「神社である」という事を強調し、安心感を与える事で、配布数が飛躍的に伸びていった。さらに、女性には「お花の種も入ってます」と付け加えた。これがなかなかに受けた。言葉と

8・2～5 神社序雅樂指導者養成研修会  
8・3 朝日則安・田所常典受講 於 本庁  
「お宮と親子の集い」於 加須・千方神社  
「お宮と親子の集い」於 小鹿野・小鹿神社  
神社序役員会 於 寶登山神社  
初任神職研修会 於 八名受講  
於 寶登山神社

序務日誌抄

(神社実務部員)



この庁報は再生紙を使用しています